

# みんぱく 私の逸品 東北の蓑と前衛のデザイン

標本番号 H0029920  
地域 日本新潟県  
受入年 1975年

ポルドー第3大学准教授  
民博 外来研究員

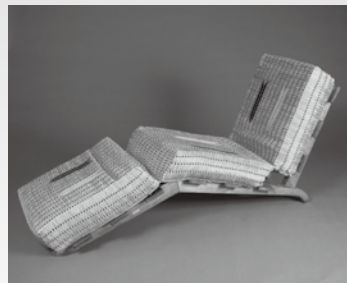
アンヌ・ゴツ

かつて東北地方で使われていたこの蓑かさの造形美はわたしを夢想の世界に誘う。波打つ稲わらの奥深い黄金色こがねは北国の凍てつく雪に映え、人を温かくつつみこむ。ゆさゆさと揺らぐ蓑わらそのものの量感、襟部分の緻密な編み目、その合間に点在する藍と白の紐ひもがなす細かな文様、これらが繊細かつ力強い旋律を生み出す。まるでときを超えた永遠の命が宿っているかのようなこの古い外衣にわたしは心を奪われ、雪深い北国に思いをはせる。

わたしは、日本人の日常生活に椅子がどのように導入されたかというテーマを通して、日本の物質文化における近代化を研究するフランス人女性で前衛デザイナーのシャルロット・ペリアン（一九〇三—一九九九）が戦前に設計した寝椅子である。米俵や蓑の編みの技術を応用したカバーで覆われた三つ折りクッションは、一九四〇年から一九四一年の冬に東北の農民との協力によって制作されたものである。和風住宅にも溶け込むように、前衛的な要素と日本の伝統を巧みに調和させた彼女の作品は大きな反響を呼んだ。

近代建築の巨匠ル・コルビュジエの右腕であったペリアンは、一九四〇年に輸出工芸を近代化するための指導者として日本の商工省に招へいされ、産業デザイナーや民芸運動の担い手たちと交流した。当時、民芸運動家たちは疲弊した東北地方を復興させる手段として、副業となる工芸制作の普及に力を入れていた。この動きに共感したペリアンは、翌年の農作業に備えるための冬場の「藁仕事」の技術や芸術性に惹かれ、俵や蓑の匠たくみを調度品のデザイナーに生かせないかと考えた。この構想から生まれたくだんの寝椅子は、一九四一年に商工省貿易局後援のもと、ペリアンの創作作品展覧会「選択伝統 創造」に展示され、工芸史上に残る彼女の金字塔のひとつとなった。

雪国の古蓑が秘める美の源泉は、次世代のペリアンに再び見出されるのを、博物館の片隅で静かにまっている。（山中由里子訳）



シャルロット・ペリアン「折りたたみ式寝台」  
（山形県立博物館 所蔵）